

# 『歎異抄』第三章について

——悪人正機説の始祖の問題に関連して——

紅 煤 英 頭

はじめに

近年、悪人正機説の始祖の問題についての論議がなされている。これは悪人正機説といえは親鸞の教説であるということが当然のこととして考えられていたのであるが、最近梶村昇氏が悪人正機説の始祖は親鸞ではなく、法然であると主張され、御著二部（『悪人正機説』〈大東名著選、一九九二年二月〉、『法然の言葉だった「善人なおもて往生をとぐいはんや悪人をや」』〈大東出版社、一九九九年三月〉）を出版された。勿論氏の御高見に敬意を表するのであるが、これは大変重要な問題であり、論議の必要なことと考え、以下私見を述べることにする。

## 一、善人尚以往生況悪人乎事口伝有之

大正の初期（五、六年かといわれる）、京都の醍醐三宝院で『法然上人伝記』が発見された。これが『醍醐本法然上人伝記』である。この中に前掲の「善人尚以往生況悪人乎事口伝

有之」の文があつたのである。この文は『歎異抄』第三章冒頭の親鸞の言葉と考えられている「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」とほぼ同文であり、全く同意と考えられるものである。このことから悪人正機は、親鸞の教説と考えられていたが、実は法然の教説だつたのではないか、という議論がその時沸騰してもよかつたはずであるが、そうはならなかつたのである。それは当時の浄土宗（鎮西派）の教学の重鎮望月信亨氏が、『醍醐本法然上人伝記』三、三心料簡および御法語、の最後の条である「善人尚以往生況悪人乎事口伝有之」について

この文は最後の第二十七条にあり。思ふに編者の加筆なるが如し。また「善人尚以往生況悪人乎」の語は、『和語灯録』等にかつて載せざるところなり。（『醍醐本法然上人伝記に就て』仏書研究第三十七、第三十八、大正七年一・二月）

と述べたのである。「醍醐本法然上人伝記」が発見されてすぐに「編者の加筆なるが如し」とここに述べられた望月氏の

言葉の影響は当時決定的なものであったであろう。

戦後直ちに刊行された家永三郎氏の『中世仏教思想史研究』（昭和二二年）所収の「親鸞の宗教の成立に関する思想的考察」は悪人正機の問題について論じ、『醍醐本』についてもとりあげているが、基本的には望月説をうけ

法然はいはばこの常識化した善正悪傍の立場にとどまったのであり、これを逆倒して悪正善傍の立場に突き進んだ処に親鸞の独自の展開を見ることが出来るのではなからうか。この様に親鸞の悪人正機説を法然よりの継受と見なすことは一まず不可能となった。

と述べている。梶村氏は望月氏、家永氏の意見を批判して『醍醐本法然上人伝記』の「善人尚以往生況悪人乎」の文は第一級の資料としての価値あるものであることを論じ、従来親鸞の言葉と考えられていた『歎異抄』第三章冒頭の「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」の言葉は親鸞がいったものではなく、法然がいった言葉であるから、悪人正機説の始祖は親鸞ではなく、法然であると主張するのである。<sup>3</sup>「善人尚以往生況悪人乎」の文については、覚如の『口伝鈔』十九にも

如来の本願は、もと凡夫のためにして聖人のためにあらざること。本願寺の聖人、黒谷の先徳より御相承として如信上人おほせられていはく、世のひとつねにおもへらく、悪人なをもて往生す、いはむや善人をやと。このことをくは彌陀の本願にそむき、ちかく

は釈尊出世の金言に違せり。そのゆへは、五劫思惟の劬勞、六度万行の堪忍、しかしながら凡夫出要のためなり。またく聖人のためにあらず。しかれば凡夫、本願に乗じて報土に往生すべき正機なり。（中略）しかれば善人なをもて往生す、いかにいはむや悪人をやといふべしとおほせごとありき。（真聖全三の三二）

と「善人尚以往生況悪人乎」の文の意が法然より親鸞に伝えられたと述べられており、また近年（平成元年九月）に浄土宗西山深草派の寺院より『輪円草』（一三八六年六月作）という書物が発見され、そこに

一切善悪凡夫乃至為増上縁也文十悪之与五逆乃至回心皆往・私云善人尚生況悪人乎六八誓願如船後

という文があつた。<sup>4</sup>ここに「私云善人尚生況悪人乎」とあるように、浄土宗西山派にも「善人尚以往生況悪人乎」の文の意が継承されていることを知ることができるのである。

このように『醍醐本法然上人伝記』の「善人尚以往生況悪人乎」の文は発見後すぐに出された望月信亨氏の「思ふに編者の加筆なるが如し」の強い影響等により法然の言葉ではないように扱われてきたが、これは法然の言葉であつたと考えるのが正しいと思われるのである。しかしながら、これが法然の言葉であるからといつて、悪人正機説の始祖を法然とすることが出来るのであろうか。以下考察をすすめることにする。

## 二、悪人正機説の起源

家永三郎氏の主張に

勿論悪人救済は本来浄土信仰の内に最初から内在する要素として三国浄土教を一貫しているのであり、早く新羅の元暁の遊心安樂道にすら、「故知、浄土宗意本為凡夫兼為聖人。……浄土奥意本為凡夫非為菩薩也」と云う説が見えるほどであるから悪人正機説の創唱を何時何人がと精密に限定しようとすることはあまり意味のない追究かもしれない。

とあるように、一部『選択集』引用の元暁(六一七—六八六)の『遊心安樂道』の文により悪人救済の思想は本来浄土教に存するものであると述べているが、迦才(初唐代)の『浄土論』には「浄土の興意は、本凡夫の為にして、菩薩の為にあらざる也」(浄土六の六四三)、善導(六一三—六八二)の「玄義分」には「定んで凡夫の為にして聖人の為にせざるを来し証す」(真聖全一の四四八)とあるのであり、その意味では悪人正機説の始祖が誰であるかを決めることは難しいことでもあり、また意味のないことかもしれない。しかし悪人救済の思想の内容は浄土教の展開とともに進展したのである。上述のように、悪人救済の思想は浄土教において古くからあったものであるが、「悪人正機」の語は、浄土教を大きく展開させ、悪人救助の思想も深めた法然にも親鸞にもみられないも

のであり、浄土教の展開状況から推測してそれ以前にあったとは考えられない。もし存在していたとしても、それは法然や親鸞の思想とは相当意味を異にするものである。

法然・親鸞以後も、浄土真宗および浄土宗・鎮西・西山各派において悪人救済の思想は強調され、鎮西派智演(二二九〇—一三七二)の『夢中松風論』には「悪人を正機として、善人をば傍機と定む」(統浄土宗全書九の三〇五)という言葉もみられるが、「悪人正機」という四字熟語があらわれるのは江戸時代の『歎異抄』第三章の解説においてである。

『歎異抄』の注釈書として寛文二年(二六六二)後間もなく刊行された円智(一一六七〇)の『歎異抄私記』には、第三章の解説に

悪人本願の正機たる義を結する(二八丁)。  
弥陀の本願善悪を接すること勿論なり。しかりといえども、大悲本願のおこりは鈍根重障の衆生を救はんための願なるがゆへに、悪人をもて願の正機といふなり(四四丁)。

とある。ここには「悪人本願の正機」、「悪人をもて本願の正機とす」と悪人正機の意を顕わす語はあるが、四字熟語としての「悪人正機」の語は未だ見いだせない。『歎異抄』の注釈書においてはつきり四字熟語としての「悪人正機」の語が出てくるのは、少し時代の下がる深励(二七四九—一八一七)の『祥』(一七八八—一八四二)の著書においてである。深励の最

初の講義録と考えられる『歎異抄講林記』には諸処に「悪人正機」の語が見いだせるが、第三章の解説に

彌陀ノ本願ニハ罪惡深重煩惱熾盛ノ衆生ヲタスケンガタメノ願ニ  
テマシマストアル処ヲ成立スル第三章ナリ。是ノ如ク拜見スルト  
キハ一章離レ離レニハ見エズ。後ノ九章ハミナ第一章ヲ成立  
スルトミエタリ。中ニ於テ此章ハ彌陀ノ本願ハ悪人正機トイフコ  
トヲ述ブル（真宗大系二四の一）

とあるように「此章ハ彌陀ノ本願ハ悪人正機トイフコトヲ述  
ブル」と第三章が「悪人正機」を述べる章であることを四字  
熟語ではつきり述べているのである。また了祥の晩年の講義  
録である『歎異抄聞記』には前掲の深励の書と同様に諸処に  
四字熟語としての「悪人正機」の語が見られ、第三章につい  
ては、解題の科文に、第三章（悪人正機章）（統真宗大系二一の  
五）とあり、本文中にも第三章の解説にあたり、第三、悪人  
正機章（同九〇）とあり第三章を悪人正機章と名づけ、これ  
も深励と同様に悪人正機を教示する章と述べているのである。  
このように、遅くとも深励・了祥の時代に四字熟語としての  
「悪人正機」という言葉が成立し、また悪人正機説といえは  
『歎異抄』第三章の教説であるということが定着したものと  
考えられる。現代においても、一般的に悪人正機説といえは  
『歎異抄』第三章の思想と考えられているはこの故であり、悪  
人正機説の起源はどこかとすれば『歎異抄』第三章と考える

べきであろう。

### 三、「歎異抄」における異義

『歎異抄』の著者を河和田唯円と定めたことと共に並び称  
される了祥の功業は『歎異抄』における異義について

誓名別信と、専修賢善で、異義の体はきまる。（中略）第一、第二  
章は誓名別信の誡め、第三、第四章は専修賢善の誡め、後の四章  
は二執の中、ませこそにして出したもの。（『歎異抄聞記』、統真宗  
大系二一の二二）。

と述べているように、誓名別信計と、専修賢善計の二つに整  
理されることを論じたことである。（誓名別信計については疑問  
があるがここではふれない<sup>10</sup>）。ここに了祥も述べているが、第三  
章は専修賢善計に対する誡めとして出されているものと思わ  
れる。

これも了祥の功業の一であるが、『歎異抄』作成の動機は  
善鸞事件との関わりも大きいと思う。

善鸞の異義について了祥は

信行不離、他方の中他方、信行一念等、皆この誓願家の御誡め。  
口称をきらひこくるで念仏は一重の他方、その奥に又誓願真如を  
信ずる他方ありとしたもの。どうしても念仏がきらひじやで、信  
心と念仏とを引きわけるで、信行不離の御誡めが出る。皆是れ祖  
師の御在世より旧くある邪義。即ち善鸞上人など、先づこの異義

の方にみえる。(『歎異抄聞記』、続真宗大系二一の三二二)。

と述べているように善鸞の異義を誓名別信計とみる。この説は現代でも有力であるが、私は善鸞が念仏者を造悪者であるといつて役人に訴えたり、義絶された後も念仏をすてなかつたようであること、また親鸞が善鸞義絶後の著述である『浄土三経往生文類(広本)』や『正像末和讃』誠疑讀において、従来よりさらにきびしく自力念仏を否定し排しているところから善鸞の異義は専修賢善計であつたものと考えるのである。

『歎異抄』のむすびに唯円が

かなしきかなさいはいに念仏しながら、直ちに報土にむまれずして辺地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに信心ことなることなからんために、なくなふをそめてこれをするす。なづけて『歎異抄』といふべし。外見あるべからず。(真聖全二の七九三)。

と述べているのであるが、唯円の歎異の一番のポイントは、さいわいに念仏しながら辺地(化土)に生まれる者が多い、ということであつたのである。自力念仏を説いた専修賢善計の善鸞一派が正に唯円の歎異の対象であつた可能性は十分考へられることである。

#### 四、第三章の「とおほせさふらひき」について

悪人正機説の起源を『歎異抄』の第三章とすべきことは、上に述べた。第三章は

『歎異抄』第三章について(紅 椽)

善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいはいく、悪人なを往生す、いかにいはいはんや善人をや。この條一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆへは自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむころかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず。しかれども自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はとおほせさふらひき。(真聖全二の七七五)。

とあるものである。第三章の最後が「とおほせさふらひき」となつていふことについて増谷文雄氏は

これらの諸段は、古来から、親鸞の言葉をそのまま直接法で書いたものと考えられている。私もまたそう思う。そうだとすると「とおほせさふらひき」までが親鸞のことばであろう。(中略)つまり『歎異抄』の第三段は、法然のことばをそのままに「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや」とうち出して、それになりたい人間常識の反論をあげ、それがこの念仏の論理によればまったく不条理であることを語り、だから師の法然は、「善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」と仰せられたのだと言うのである。それを結語の一部のみを、直接法からにわかに関接法にかえて、それを親鸞の仰せに読みかえようというのは、あまりに無理なよみ方である。(『法然の言葉』増谷文雄全集九、四一三頁)。

と「とおほせさふらひき」とある語までが親鸞の言葉である  
と主張し、その他の第三章の言葉はすべて唯円が親鸞から聞  
いた法然の言葉とするのである。もしこの主張がただしけれ  
ば、第三章の冒頭の「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人  
をや」の文だけでなく、「とおほせさふらひき」をのぞく第  
三章の文全部が法然の言葉ということになるので、第三章を  
悪人正機説の起源と考える私には、悪人正機説の始祖を法然  
とすることに何の異論もないことになるのであるが、唯円は  
『歎異抄』の序文に「仍つて故親鸞聖人の御物語之趣耳の底  
に留むる所、聊か之を注す」（真聖全二の七七三）と述べ、終  
わりには「古親鸞のおほせごとさふらひしおもむき、百分が  
一、かたはしばかりをもおもひいでまひらせて、かきつけさ  
ふらふなり」（真聖全二の七九三）と述べているのであるから、  
あくまでも親鸞の言葉として述べたものである。第三章にお  
いて「とおほせさふらひき」は唯円の言葉とみ、その他は唯  
円が親鸞から聞いた親鸞の言葉と考えるべきであろう。それ  
では何故師訓十章の中で第三章と第十章とが「とおほせさふ  
らひき」で終わり、他の八章は「と云云」で終わっているか  
であるが、これについては了祥は

祖語十章の中に「おほせられき」と止めたのは、第十章と今此の  
第三章ばかり。其の中第十章は、故聖人の御物語を挙げ終る仕舞  
ぢやで「おほせられき」と止めそうなものなれども、此の第三章

に、殊更「おほせられき」とあるう筈もない。又此は地体祖語ゆ  
へ「おほせられき」と宣へば、御自身の御語であるう筈がない。元  
祖の御語を出させらるるで「おほせられき」とある様な、依て此  
の「おほせられき」に古来つかへて、香月院（深励）もぐにやぐ  
にやとしておかれた。私にも色々と考えて見たが、何とも心が済  
まなんだ処、此は夢のさめた如く、十章の中前の三章は安心の訓  
後の七章は起行の訓と、安心起行の分れる界ぢやで、第三章を別  
して「おほせられき」と止めたものと見ると、此義は決択。（『歎  
異鈔聞記』、続真宗大系二一の九八）。

と述べている。即ち第十章は故聖人の御物語（師訓）の終わ  
りだからわかるが、三章については色々考えたところ。「元  
祖の御語を出させらるるで（おほせられき）」とある様な、と  
あるのが増谷氏の意見と重なって興味深い。了祥は『醍醐本  
法然上人伝記』の「善人尚以往生況悪人乎」とある言葉につ  
いては知らなかった筈であるが、『口伝鈔』の法然から伝え  
られたという悪人正機を示す言葉は知っていたのであるから、  
あるいは増谷氏の意見と同じことが頭を過ぎったかも知れな  
い。しかし了祥は第三章の文は親鸞の言葉と解したのである。  
これは正しい見解だと思ふ。

要するに悪人正機説は親鸞の言葉である『歎異抄』第三章  
の教説なのである。

## 五、第三章における善人と悪人

親鸞の人間の見方は一般的に大きく分けて二つあるとされている。一は「一切善悪凡夫人」(『正信偈』、真聖全二の四四)、「老少善悪のひと」(『歎異抄』、真聖全二の七七三)等とある人間には善人もあれば悪人もあるとする見方と、二は「一切群生海、無始より已来、乃至今日今時に至まで、穢悪汚染にして、清浄の心無く、虚仮諂偽にして、真実の心なし」(『教行信証』「信巻」、真聖全二の五九)等とある一切の人間を悪人とする見方である。ところが第三章における善人・悪人は、善人もあれば悪人もあるとする見方ではあるが、極めて特別の意味で語られているのである。即ち善人は「自力作善のひと」であり、悪人とは「他力をたのみたてまつる悪人」とある悪人のことである。

上述のように、私は第三章は専修賢善計に対するものであり、その中心は善鸞一派の自力念仏の批判にあつたであろうと考える。そのことから窺われるのであるが、ここで述べられている善人である「自力作善のひと」とは

しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば真実報土の往生をとぐるなり(真聖全二の七七五)

とあるひとのことであり、唯円の歎異した「かなしきかなさはいはいに念仏しながら、直ちに報土にむまれずして辺地にや

『歎異抄』第三章について(紅 椽)

どをとらんこと」(真聖全七九三)とある自力真門念仏の主張者のことであると考えられるのである。<sup>(15)</sup>そしてこの悪人については了祥が

悪人往生とは唯わろき者の往生といふ義ではない。自身は煩惱具足罪惡の凡夫と見限りて、常没常流転断善闡提の如く、更に出離の縁なしと見限りて、此身を助け給ふ彌陀の本願なれば、我身を惡と捨てて本願力を頼む、是を悪人往生と名けたもの。(中略)我身を惡と振り捨てたる機の深信から悪人となづけたものなり。(『歎異鈔聞記』、続真宗大系二一の九)。

とある。「他力をたのみたてまつる悪人」とあるように親鸞が自分の信のうえでの実感を語つたものであるから、「機の深信から悪人となづけたもの」と釈されていることは至当であると思う。<sup>(16)</sup>

このように、第三章は専修賢善計に対しての言葉であり、とくに自力真門念仏者(善人)に対し「ひとへに他力をたのみどころかけたるあひだ、彌陀の本願にあらず」と誠しめたものである。このように善人(自力真門念仏者)の真実報土の往生をはつきり否定しているのがこの第三章なのである。

周知のように、念仏の中における自力(真門)・他力(弘願)の分別は法然にはない親鸞の發揮なのである。従つて冒頭の「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや」の語そのものは法然に始まると考えるのが妥当ではあるが、悪人正機説の

起源とみるべき『歎異抄』の第三章の内容ははまぎれもなく法然のものではなく親鸞のものであり、教説なのである。

## むすび

近年問題となっている「悪人正機説」の始祖についての私見を述べた。家永氏の指摘のように悪人救済の思想は本来浄土教に内在していたといえるものである。浄土教は時代とともに他力的に展開し、悪人救済の思想も深まったのである。それが大きく展開したのが法然の念仏一行専修の主張であったのであり、そこに自ずと悪人救済の思想も大きな展開があつたこともまた事実である。そして「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや」の言葉は法然が最初にいったものであろう。しかし四字熟語としての「悪人正機」の語が登場するのは親鸞の語録である『歎異抄』第三章の解説においてなのである。そしてこの章における悪人の意味も教説も法然のものではなく、全く親鸞のものなのである。

以上により私は悪人正機説の始祖は親鸞であると考える。<sup>1)</sup>

尚親鸞が念仏と諸善とを機について比校対論した二機対の中（『教行信証』「行巻」、真聖全二の四一）、『愚禿鈔』、真聖全二の四六〇）に「善悪対」を設け、悪人救済を強調した親鸞が「自力作善のひとつ（真門念仏者を含む）」を悪機とし、弘願念仏者である「他力をたのみたてまつる悪人」こそが善機であ

るとしているところに、法然には未だ残存している一面のある善正傍悪的要素が完全に払拭された親鸞の悪人正機説をみることができると思う。

- 1 望月信亨氏「醍醐本法然上人伝記について」（『浄土教之研究』九五一頁）。
- 2 家永三郎氏「中世仏教思想史研究」一二頁。
- 3 この辺のことについては『悪人正機説』第二章醍醐本『法然上人伝記』について、四九頁以下。『法然の言葉だった「善人なおもて往生をとぐいはんや悪人をや」第三章醍醐本』法然上人伝記』、七一頁以下に詳論されている。

4 『悪人正機説』一三二頁以下。『法然の言葉だった「善人なおもて往生をとぐいはんや悪人をや」』一五五頁以下。

5 家永三郎氏「中世仏教思想史研究」一九頁。

6 浄全六の六二五。法然は『選択集』二門章（真聖全一の九三〇）に、「元曉「遊心安樂道」云「浄土宗旨本意凡夫兼為聖人」と述べている。

7 梶村氏「悪人正機説」一一五頁以下。浄土宗鎮西派祖弁長、浄土宗西山派祖証空と親鸞は同じ法然門下ではあるが、それぞれ教説は異なるものである。人間観も相違する故に、言葉は近似していても悪人観にも明らかな相違があると考えられる。石田充之氏「日本浄土教の研究」第三篇、一四六頁以下。拙稿「法然門下における親鸞の人間観の特異性」（印仏研究第一八の二）。

8 寿国（一六六三—一七四九）の『歎異抄可笑記』（一七四〇年作）に「善人タニトハ約ニ大悲トキ為ニ悪人正機ニ」とあるが、ここに「悪人正機」とある語が四字熟語として使用されたものか

どうかは不明であるので、ここでは取り上げない。

- 9 中村 元氏『仏教語大辞典』(縮刷版) 二二頁、『岩波仏教辞典』五頁、の「悪人正機」の項。

また梶村氏も述べているように現代使われている高校の日本史の教科書では悪人正機説の説明に『歎異抄』第三章が引用され、始祖は法然ではなく親鸞となっている。(『悪人正機説』、一頁以下)。

- 10 拙稿「了祥氏の誓名別信計についての疑問」(相愛女子短期大学研究論集第三六巻、平成元年三月)。

- 11 『歎異抄聞記』、続真宗大系二の一・二以下。

- 12 拙稿「親鸞における真門念仏と弘願念仏についての一試論」(相愛女子短期大学研究論集第四〇巻、一九九三年三月)、六頁以下。拙著『浄土三経往生文類(広本)講讀』所収、九五頁以下。

- 13 第三章の文については、どの部分が親鸞の言葉であるか、また唯円の言葉か意見があるが、親鸞から聞いた言葉に唯円が故意に自分の言葉を入れることは考えられない。

- 14 了祥は『歎異抄聞記』(続真宗大系二の四)に『口伝鈔』一九の「善人なおもて往生すいかにはんや悪人をやというべしとおほせごとありき」の文を引用している。

- 15 藤 秀翠氏も、「自力作善のひと」とは、第二十願の機を主として指していることが推察されるのであると述べられている。(『歎異抄講讀』二二二頁)。

『教行信証』「化土巻」真門釈結示には「凡そ大小聖人、一切善人、本願の嘉号を以て己の善根と為すが故に、信を生ずること能はず、仏智を了らず」(真聖全二の二六五)とあり、『正像末和讃』誠疑讃には「罪福ふかく信じつつ 善本修習するひとは 疑心の善人なるゆへに 方便化土にとまるなり」(真聖全二

の五二四)等とあるように、親鸞自身の著作の中にも自力真門念仏のひとを善人といつてところがある。

- 16 悪人について、社会的・身分的意味があるのではないかという二葉憲香氏(『親鸞の研究』一九七頁以下)を代表とする意見があるが、親鸞における悪人とは『歎異抄』第三章に「煩惱具足のわれらはいづれの行にても生死をはなることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のため」とある。いづれの行にても生死をはなれることのできない「煩惱具足のわれら」のことなのであるから、生死の中のこのみを考慮するこの意見には賛成できない。

- 17 拙著『浄土真宗がわかる本』(一九九四年一月刊) 六三頁以下にも法然と親鸞の悪人救済の思想の相違点を論じ、悪人正機説の始祖は親鸞とすべきであることを述べた。

(キーワード) 悪人正機、歎異抄、法然、親鸞

(相愛女子短期大学教授)